

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23年 6月 14日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2009～2010  
 課題番号：21792244  
 研究課題名 (和文) 乳がん患者の自律性を支える構造化した「こころのセルフケア」  
 介入プログラムの有効性  
 研究課題名 (英文) The efficacy of intervention program "self-care of the  
 heart" to support the autonomy of patients with breast cancer  
 研究代表者  
 岡田 葉子 (OKADA YOKO)  
 日本赤十字豊田看護大学・看護学部・助手  
 研究者番号：60525070

研究成果の概要 (和文)：本研究の目的は、初回の乳がん術後患者を対象に、構造化した介入プログラム (グループワーク) を実施し、その有効性を明らかにすることである。介入プログラムの構成は、1コース4回、1回90分、1グループ6～7名のグループワークである。結果、介入プログラムへの参加により、評価尺度 POMS では、下位尺度「緊張-不安」「抑うつ-落込み」「怒り-敵意」「活気」「疲労」「混乱」の点数が低くなった。SOC では、52点から58点へと点数が高くなり、グループワークの有効性が示唆された。

研究成果の概要 (英文)：A purpose of this study is to determine the efficacy of intervention program (group work) for initial breast cancer postoperative patients. Constitution of the intervention program is group work of 6-7 one group for four times of 1 courses, once 90. By results, the participation in intervention program (group work), The POMS rating scales, subscale "Tension - Anxiety," "depression - a dip," "anger - hostility," "lively," "fatigue," "confused" score was lower. In SOC, the higher the point count to 58 to 52 pieces, effectiveness of the group work was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護、周手術期看護

## 1. 研究開始当初の背景

国内では、女性の乳がん罹患率、乳がん死亡率は上昇傾向にある。現在の乳がん治療は集学的治療が標準化され、術後のQOLを重視した術式の縮小化へと変化している。しかし一方で、治療の多様化に伴い身体的、心理社

会的サポートとなる専門的知識とケア技術の充実が求められ、多面的アプローチが必要となっている。(日本臨床. 2006 64(3); 409-416. 日がん看護誌. 2004 2;62-68)

乳がん患者を対象とした研究では、手術前後の心理状況の変化、術式別のQOL、ボディ

イメージ等に関連する報告があり、患者は常に治療に伴う不安、再発の不安、再発後の死への恐怖と常に対峙していること、3人に1人はうつ状態があること等の疾病生成論的な観点からの報告が散見される。しかし、これらの結果に対し、教育的ケアの介入を行っているものはみられるが、具体的なケアとして確立しているものは少ない。また、乳がん患者ががんと共に生きる「病を生きる力」「逆境を生きる力」等のサポートに関連する健康生成論的な観点からの報告はみられない。

そこで本研究では、がん患者のグループ介入の結果、情緒不安定、活気のなさ、抑うつ、緊張等が改善しQOLが向上した報告を基に（総合病院精神医学 2008 20(2);156-163）、情報も少なく不安も多い術後の乳がん患者に構造化された介入プログラムを応用する。グループワークは①様々な感情表出ができ、また語ることで他者をサポートできる②同病者との分かち合いと仲間意識を持てる③仲間を受け入れられ、支えられていると感じること④同じような生活上の困難やストレスに向き合うメンバー同士で、ものの見方、受け取り方、対処方法等の情報交換ができる目的がある。この経験を通し、乳がん患者がこれからの人生の意味を再構築し、自律して生活することを支えるために、研究者は、グループワークのファシリテートを行い（話し合いの場で、発言や参加を促したり、話の流れを整理し、相互理解をサポートすることで参加者の活性化、協働を促進させる）、本来進むべき方向性へ進むことを助ける。また、進む力を妨げる要因を回避し、人と人の自発性参加意欲を高め、意思決定を促進する役割がある。患者の自律性やQOLの向上を評価するために、健康生成論的観点の首尾一貫性（SOC）の評価尺度と、疾病生成論的観点の気分プロフィール検査（POMS）尺度を使用し、多方面から介入プログラムの有効性を検証することを研究目的とした。

## 2. 研究の目的

初回の乳がん術後患者を対象に、構造化した介入プログラム（グループワーク・ファシリテーション）を実施し、その有効性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 1) 調査方法

対象：本人の希望を確認し、初回乳がん手術後の患者で、1回90分4回の構造化された介入プログラムに参加する者

(1) 対象者の背景を、患者の承諾を得て、診療録より年齢、家族構成、職業の有無、術式、術後年数、病期、治療等のデータ収集をする。

(2) 対象に、初回乳がん手術後の患者を対象

に、1回90分、4回の構造化された介入プログラムを実施する。

(3) 対象に行う上記プログラムは、構造化された「こころのセルフケア」介入プログラムであり、①教育的介入 ②問題解決技法 ③支援的精神療法のグループワークを実施する。プログラムの構成は、対象者6~7名程度に固定し、1回90分、週1回を4回行う。テーマは「①今の気持ちを話してみよう」、「②病気とのつきあい方」、「③情報の大切さ」、「④コースを振り返って、自分らしく生きる工夫」である。

(4) 評価尺度は、グループワーク1回目開始前と4週間後のグループワーク終了後に、日本版POMS短縮版（気分プロフィール検査）、13項目5件法版SOC（首尾一貫感覚）の評価尺度を使用しアウトカム評価等を行う。

## 2) 調査内容

乳癌患者のQOLに関するリサーチクエスチョンの解決を目的に、信頼性妥当性の証明された評価尺度、日本版POMS短縮版により気分・感情の状態、13項目5件法版SOCによる首尾一貫感覚（ストレス対処能力）を行い身体的精神的状態と介入による変化を比較評価する。

(1) 日本版POMS短縮版（Profile of Mood States）気分プロフィール検査

おかれた条件によって変化する一時的な気分・感情の状態を「緊張」「抑うつ」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」の6つの気分尺度を評価する。下位尺度6項目ごとに①全くなかった②少しあった③まあまああった④かなりあった⑤非常に多くあった、の5段階（0~4点）のいずれか一つを選択し、合計得点として判定する。得点が高いほど気分・感情の重篤を示す。

(2) 13項目5件法版SOC(sense of coherence) 首尾一貫感覚（ストレス対処能力）

SOCは、「生きる力」「健康への力」であり、自己や環境に起きている出来事を把握できる感覚「把握可能感」、人生における出来事は対処可能な経験であるとみなす感覚「処理可能感」、動機付けの要素であり、人生を意味があると感じている程度「有意味感」の要素からなる。また、個人が生まれ持った性格特性ではなく、人生経験の中で後天的に学びとられる学習性の感覚である。

下位尺度①把握可能感5項目、②処理可能感4項目、③有意味感4項目で構成され点数が高いほどSOCが強いことを示す。SOCの高い人はストレスフルな出来事 of 精神健康へのダメージを受けにくいだけでなく、死亡や障害に陥る確率が低いことも示されている。(Breast Cancer Res Treat1999 56;45-57. Qual Life Res2004 13(9);1518.)

### 3) 介入プログラムの構成

1 コース 4 回、1 回 90 分、1 グループ 6~7 名のグループワーク・ファシリテーション (話し合いの場で、発言や参加を促したり、話の流れを整理したり、相互理解をサポートすることにより、参加者の活性化、協働を促進させる) である。

各回のグループワークのテーマは、「1 回目：今の気持ちを話そう」、「2 回目：病気との付き合い方 (乳がんとうつ)」、「3 回目：情報の大切さ (情報収集の必要性)」、「4 回目：コースを振り返って、これから自分らしく生きる工夫 (自分らしく生きるヒント)」である。グループワークでの話し合いの主体は患者であり、研究者はあくまでも支持的サポートを行う。しかし、日常の臨床では十分な情報が得にくい内容の補足として、テーマに合わせた情報提供を行う。

介入プログラムの評価方法は、介入前後に3種類のQOL尺度を実施しアウトカム評価等を行う。

### 4) 評価方法

評価は、1 コース 4 回のグループワーク介入前 (1 回目実施前) と介入終了後 (4 回目実施後) に、①日本版 POMS 短縮版 (気分プロフィール検査)、②13 項目 5 件法版 SOC (首尾一貫感覚) 等の多方面から検討し、その有効性の検証および臨床現場へフィードバック方法を検討する。

## 4. 研究成果

### 1) 結果

#### (1) 対象の背景

対象は平均年齢 62 歳であり、平均術後年数は 4 年であった。現在の治療内容は、ホルモン療法、化学療法であった。

#### (2) 日本版 POMS 短縮版 (Profile of Mood States) 気分プロフィール検査

POMS は、得点が高いほど気分・感情の重篤を示す。グループワーク開始前と終了後の比較では、下位尺度 6 項目「緊張-不安」は 8 点から 3 点、「抑うつ-落込み」は 3 点から 2 点、「怒り-敵意」は 7 点から 1 点、「活気」は 9 点から 6 点、「疲労」は 3 点から 0 点、「混乱」は 8 点から 7 点へと点数が低くなった。

#### (3) 13 項目 5 件法版 SOC (sense of coherence) 首尾一貫感覚 (ストレス対処能力)

SOC は、点数が高いほど SOC が強いことを示す。全体では 52 点から 58 点、下位尺度 3 項目「把握可能感」18 点から 21 点、「処理可能感」20 点から 20 点、「有意味感」14 点から 17 点へと高くなった。

### 2) 考察

#### (1) 日本版 POMS 短縮版 (Profile of Mood States) 気分プロフィール検査

乳がん患者は、常に治療に伴う不安、再発の不安、再発後の死への恐怖と常に対峙していること、3 人に 1 人はうつ状態であることが報告されている。しかし、この状況に対する支援は確立していないため、患者は相談できる場所もなく孤立していることが多い。

今回、グループワークによる介入により①様々な感情表出ができ、また語ることで他者をサポートできる②同病者との分かち合いと仲間意識を持てる③仲間に受け入れられ、支えられていると感じること④同じような生活上の困難やストレスに向き合うメンバー同士で、ものの見方、受け取り方、対処方法等の情報交換を行った。

グループワーク介入後には、得点が高いほど気分・感情の重篤を示す POMS の結果は、下位尺度 6 項目「緊張-不安」、「抑うつ-落込み」、「怒り-敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」において点数が低くなっていた。また、患者は「普段、周りの人に話せないことが相談できた」、「先生にはなかなか聞けないことも知れてよかった」、「気持ちが楽になった。参加してよかった」等の発言があったことから、介入プログラム (グループワーク) の有効性が示唆された。

#### (2) 13 項目 5 件法版 SOC (sense of coherence) 首尾一貫感覚 (ストレス対処能力)

乳がん患者を対象とした研究では、手術前後の心理状況の変化、術式別の QOL、ボディイメージの混乱など患者の不安や悪化等の疾病生成論的な観点からの報告が散見される。しかし、これらの結果に対し、教育的ケアの介入を行っているものはみられるが、具体的なケアとして確立しているものは少ない。また、乳がん患者がいかにして回復され保持され増進されるのか等、がんと共に生きる「病を生きる力」「逆境を生きる力」へのサポートに関連する健康生成論的な観点からの報告はみられない。

SOC は、「生きる力」「健康への力」であり、自己や環境に起きている出来事を把握できる感覚「把握可能感」、人生における出来事は対処可能な経験であるとみなす感覚「処理可能感」、動機付けの要素であり、人生を意味があると感じている程度「有意味感」の要素からなる。また、個人が生まれ持った性格特性ではなく、人生経験の中で後天的に学びとられる学習性的感覚である。

今回、グループワークの実施により、点数が高いほど SOC が強いことを示す SOC 得点は介入後に高くなった。下位尺度「把握可能感」、「処理可能感」、「有意味感」毎の比較においても高くなった。

SOCの高い人はストレスフルな出来事の精神健康へのダメージを受けにくくだけでなく、死亡や障害に陥る確率が低いことも示されているため、(Breast Cancer Res Treat1999 56;45-57. Qual Life Res2004 13(9);1518.) 今後、乳がん患者がグループワークの経験を通し、これからの人生の意味を再構築し、自律して生活することを支えるために有効である可能性が示唆された。

### 3) まとめ

介入プログラム(グループワーク)により、点数が高いほど気分・感情の重篤を示すPOMSは点数が低くなり、点数が高いほどSOCが強いことを示すSOCは点数が高くなった。

乳がん患者がこれからの人生の意味を再構築し、自律して生活することを支えるための介入プログラムの有効性が示唆された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権] 出願状況 (計0件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡田 葉子 (OKADA YOKO)

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・助手

研究者番号：60525070